

よつかいちの自然

第3集 住宅地、公園、畠地



四日市市

表紙写真:南部丘陵公園の梅園、エナガ、ヒゲコメツキ

内扉写真:巻雲(もつれ雲)

裏表紙写真:カキ畠、ベニスズメ、二ホンカナヘビ、アカシデ、ヤママユ幼虫

よつかいの自然

第3集 住宅地、公園、畠地



絶滅危惧種のランクについて

本書では絶滅危惧種のランクは、三重県レッドデータブック2015の表記を使用した

絶滅の危険度の高いものから順に

絶滅種	EX	県内ではすでに絶滅したと考えられる種
絶滅危惧IA種	CR	ごく近い将来絶滅の危険性が高い種
絶滅危惧IB種	EN	IA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
絶滅危惧II種	VU	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧種	NT	生息条件によっては、「絶滅危惧種」に移行する要素を持つ種

発刊にあたって

本市は、中京工業地帯を形成する全国屈指の産業都市であるとともに、豊かな緑、清浄な水など自然にも恵まれ、実にさまざまな顔と魅力を有しています。とりわけ、国定公園である鈴鹿山系の縁豊かな樹林、丘陵地の里山、河川や湿地、市内唯一の自然海岸である吉崎海岸など、多彩な自然も本市の大きな魅力の一つといえます。

このような「恵み豊かな自然を守り、より良い環境を創り、将来の世代に引き継いでいくこと」が私たちに課せられた責務であります。

四季折々を感じられる豊かな自然環境を有する本市ですが、近年、開発や外来生物の侵入など、さまざまな要因により、その多様性が失われつつあります。

そんな本市の自然の現況を適切に把握し、多くの皆様に、市内の身近な自然に親しんでいただくため、第1集「丘陵地や山地の林」、第2集「河川・湿地・地質」に続く第3集「住宅地・公園・畠地」を発刊いたしました。山地や川辺に限らず、普段皆さんのが生活している周囲にも、思っている以上に多様な生き物たちが息づいています。また、市内には大きな公園もあり、気軽に自然に親しむことができる環境も整っています。

本冊子の活用により、身近な自然と触れ合う機会が増え、自然の尊さや自然を守る思いを育むことで、だれもが幸福を実感しながら暮らしていただけることを願って、発刊のあいさつとさせていただきます。



四日市市長
森 智広

目次

四日市市の住宅地・公園・畠地の概況	1
市街地の中に息づく自然	3
春の公園散策 樹木の見本市 垂坂公園	
エノキとゴマダラチョウ フランスギクに集まる昆虫	
公園のトンボ	13
夜の公園 灯火に集まる昆虫 里山保全活動	
秋の公園	19
ドングリ 公園のキノコ	
公園の野鳥	27
モズのはやにえ 味の素 バードサンクチュアリ	
ヤドリギ 食べられる草や木の実	
タンポポの仲間	33
虫えい 公園や庭先のクモ 帰化植物	
逃げ出す園芸植物 住宅地周辺の哺乳類	
キジバトの繁殖	41
竹巣箱を利用したシジュウカラ ツバメの仲間 スズメ	
野鳥の食事 野鳥が食べる木の実 野鳥が集う庭 庭の水場	
花を訪れる虫たち	49
昆虫の身の守り方 さまざま 植物の身の守り方	
カマキリの仲間 ツマグロヒヨウモンの生態	
クマバチとタイワンタケクマバチ	59
竹筒を利用するハチ ハチの仲間	
テントウムシの仲間	64
セミの仲間 ツルウメモドキに集まる昆虫 ハゴロモの仲間	
バッタ・コオロギ・キリギリスの仲間 ヤママユの仲間 スズメガの仲間	
薪置き場の生き物	73
住宅地周辺のカタツムリ 土の中の生き物	
野鳥のフィールドサイン 草花の冬越し ロゼット 雜草の強さ	
畠地の昆虫	79
畠地の雑草 畠地の動物たち 野菜や果物の見知らぬ花	
植物 仲間の増やし方	83
夜に咲く花 速く咲く花	
鎮守の森	87
国の天然記念物 イヌナシ・アイナシ自生地 よっかいの巨樹	
イラストマップ(南部丘陵公園)	91
索引 	93
参考に使った本	95



垂坂公園・羽津山緑地から望む市街地



南部丘陵公園の景観



垂坂公園・羽津山緑地から望む市街地



四日市市の住宅地、公園、畠地の概況

四日市市は三重県の北部に位置し、鈴鹿山脈の標高1100mから伊勢湾に面した海岸部まで多様な環境を有している。

本市は人口およそ31万人。古くは東海道の宿場町として栄えたが、近年は近鉄四日市駅を中心として市街地が広がり、鉄道沿線には古い集落があり、郊外には住宅団地が多く散在している。

市内の大きな公園を紹介すると、県立北勢中央公園には市場溜という大きな池があり、冬季はカモ類の渡来地となっている他、雑木林では昆虫や野鳥も多くの種類が観察される。垂坂公園・羽津山緑地には四日市市には自生しない珍しい植物が多く植えられており、野鳥も近い距離から観察ができる。南部丘陵公園は丘陵地を中心となり、南部アルプス縦走路が整備されている。また、トンボ池や自然生態園があって様々な種類の動植物を観察することができる。他にも市内には運動公園が何ヵ所がある。

畑地では、お茶、小麦、大豆が出荷量の多くの割合を占めるが、生き物の観点から見れば、住宅の周辺や丘陵地の中にある小規模な畑地の方が多彩な生物に接することができる。いずれの場所においても、生き物の生態を知り、観察眼を養うことによって自然界の素晴らしさが見えてくるものと思われる。



丘陵地周辺の畠地の景観



市街地の中に 息づく自然

市の中心部には、ほとんど自然がないように見えます。しかし、よく見るとアスファルトの隙間や街路樹の植え木、側溝などに生き物の姿を見つけることができます。



クスノキは市の木でもあり、中央通りのクスノキ並木は平成6年に「新みえ街路樹十景」に指定されている。クスノキは常緑樹だが、桜の時期に前年の葉が紅葉し、新葉と入れ替わり最も美しい時期を迎える。



シロツメクサは欧州原産の帰化植物。牧草として日本に持ちこまれた。誰でも一度は四葉のクローバーを探したことがあるだろう。



交尾をするニホンカナヘビ。本種は平地から山地まで生息する。体の大きな雌が雄の体に咬みついている。

アオスジアゲハの成虫(左上)は街中でも見かける機会が多い。翅の水色が鮮やか。成虫は5月中旬から年3~4回発生する。幼虫(右上)はクスノキの葉を食べる。



コメツブツメクサは欧州から西アジア原産のマメ科の一年草。春にかわいい花を咲かせる。



ニワゼキショウとオッタチカタバミ(黄色)は共に北米原産の帰化植物。オッタチカタバミの花は立ち上がる。



カタバミの花で蜜を吸うヤマトタジミ。本種はカタバミ類を食草とするので、街中でも見られる。食草からあまり離れない。



ヒメエグリバの幼虫を巣に運ぶクロヤマアリ。自分の体重より重い獲物を運ぶ。



ハシブトガラスは嘴の幅が広く、カーカーと澄んだ声で鳴く。市街地、山地、漁港に多く、ハシボソガラス(P76)とある程度すみ分けている。秋から冬には両種が混じって大きなねぐらを形成する。



アオダイショウは古い木造家屋に生息することがあるが、近年著しく少なくなった。



ハツカネズミは頭胴長7cmほどの家ネズミ。天井裏や納屋に生息する。ペットにしたいほどかわいいが、臭いが難点。



シベリアイタチはニホンイタチ(第2集P5)に比べ体が大きく尾が長い。体色も黄褐色みが強い。土管なども巧みにくぐり、鳥やザリガニなど小動物を食べる。



アオマツムシは1980年頃から分布するようになった樹上性の外来昆虫。苗木の移動やトラックに付いて分布を広げた。8~9月にリューリューと大きな声で鳴く。



ヒメオドリコソウは欧州原産のシソ科の帰化植物。在来種のオドリコソウよりも花が小さい。12月頃から春まで咲く。



イエコウモリはアブラコウモリともいい、人家の屋根裏や雨戸の戸袋をねぐらとしている。尾が後肢よりも長い。以前に比べ大幅に数を減らしている。上の写真は軒下などに落ちているフン。



ネジバナはラン科の多年草。螺旋状のかわいい花に人気がある。やってきたのはモンシロチョウ。



春の公園散策

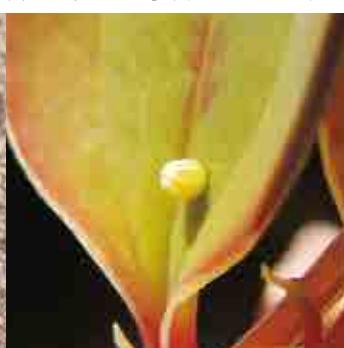
春を迎えるとさまざまな命が活動を始めます。芽吹いたばかりの新芽は、昆虫たちの絶好の餌となります。生き物の息吹を感じるには最適の季節と言えます。



黄色いサンシュユや白いユキヤナギが咲き、木々が芽吹き始めた公園。



ヒメウズは石垣などに普通に見られるキンポウゲ科の多年草。花は5mmほどしかない。



成虫越冬したルリタテハ(左)は、開き始めたばかりのサルトリイバラの葉に産卵した。



ベニシダの新葉は名前の通り赤く鮮やか。



アカシデの雄花は、いかにも春が来たことを実感させてくれる美しさがある。



ミツバツチグリは日当たりの良い野に生育し、3月から花を咲かせる。葉は三出複葉。



公園の草地にできたコウベモグラのモグラ塚。周囲はオオイヌノフグリなどが咲き誇る。



ヒメハギは日当たりの良いやや乾いた場所を好む常緑の多年草。ヒメハギ科に属し、花の形がほかに類を見ない。



ツクシはスギナというシダ植物の胞子茎。ツクシは春の到来を感じさせてくれる懐かしい味。都会では料亭の一品として出されることもある。



一見ゼンマイのようだが、正月飾りに使うウラジロの新葉。



ニガナは数個の舌状花を咲かせる。コハナバチ類がよく集まる。



春の南部丘陵公園上空にできた8羽のサシバ【EN】のタカ柱。南部丘陵公園は北上するサシバのルートになっており、この先岐阜市の金華山方面に向かう。上空の観察も見逃してはいけない。



ベッコウガガノボの雌は触角が小さい。雄は櫛ひげ状。



スパラキシスは4月中旬に一斉に咲く。



アケビの雌花と雄花(左)。受粉すると雌花の棒状の部分が秋に一つの果実になる。



ホリカワクシヒゲガガノボはガガノボ類では最もきれいな種類。ベッコウガガノボに似るが、翅の模様が異なる。幼虫は朽木で生育する。



ノアザミの花に来たモンキチョウの雄。本種やキタキチョウの雌は黄色が薄いので飛んでいても性別が分かる。



ペニシジミはスイバを食草とし年数回発生する。写真は雄で前翅の先が尖る。普通種ながらとても美しい。



イロハモミジは雌雄同株。葉の展開とともに雄花と両性花を咲かせる。



トガリシロオビサビカミキリは初夏に出現し、フジ類の枯木に集まる。翅端はトゲ状になる。



タブノキはクスノキ科に属する。目立たない黄緑色の花を咲かせる。



ウシカメムシは体長9mmほど。成虫越冬し4月から現れる。両肩が牛の角のように強く突出する。



アカマダラメイガは6月頃より現れる。散った花びらに擬態しているように見える。



ミミナグサは在来種。茎がやや紫色を帯びる。



キュウリグサは水色と黄色の花がぜんまい状に巻く。茎葉をもむとキュウリの匂いがする。



ゴンズイの新芽は食用になる。葉の展開とともに黄緑色の小さな花を多数咲かせる。



カラタネオガタマは別名トウオガタマといい、中国原産の常緑低木。花にはメロンのような甘い香りがある。

ヒメケブカチヨツキリは体長4.5mmほどの小型のオトシブミの仲間。バラ類の茎に産卵し蕾をだめにしてしまう。



アメリカロウバイは別名クロバナロウバイともいう。このような花の色は他に見ない。秋の黄葉も透明感があってなかなか美しい。



シャガは日陰の湿っぽい場所に群生する多年草。古く中国から渡来。



サルトリイバラは散形花序の黄緑色の花を咲かせる。茎は節ごとに曲がる。葉はイバラ餅を包むのに使われる。



前年の秋に落ちたドングリから新葉を伸ばすコナラ。冬の間に根が伸びる。虫や獣に食べられるので、成長できるものは少ない。



ウスバカゲロウ(左は成虫)の幼虫は寺や東屋などの雨のあたらない軒下にすり鉢状のアリゴクを作る。写真右は幼虫の大顎がアリを捕えようとしている。



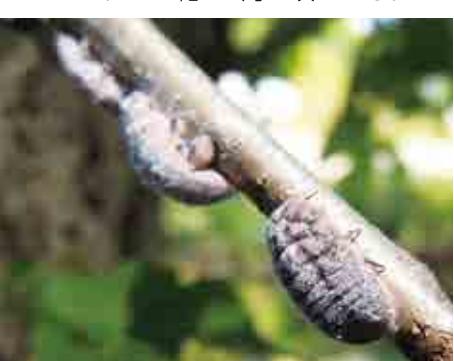
クスノキ科のヤブニッケイは黄緑色のかわいい花を6月に咲かせる。



モッコクは枝振りがいいので庭木の王様と言われる。新葉は真っ赤。



コバノガマズミはガマズミより葉も花も小さい。丘陵地に普通。



オオワラジカイガラムシの雌は12mmもあり、コナラやクリの幹に集団でいる。雄には翅がある。



カノコガは昼行性のガ。6月から発生し、幼虫はタンポポを食べる黒い毛虫。



ホシミスジ【EN】は本来県内では台高山系だけに生息する希少種であったが、2007年頃より市内の公園でも発生するようになった。



スイカズラは半常緑のつる性木本。5月頃甘い芳香のある花を2つずつ咲かせる。花は始めは白く次第に黄色に変わる。葉はイチモンジチョウなどの幼虫が食べる。左はアサマイチモンジの蛹。

樹木の見本市 垂坂公園

垂坂公園・羽津山緑地の北駐車場周辺は、全面的な植樹により造られた公園です。公園全体では170種類を越える樹木があり、市内では他で見ることができない珍しい樹木を観察することができます。



春の垂坂公園・羽津山緑地の景観。バリアフリーの道が整備されている。



スイカズラ科のハクサンボクは、伊豆半島、九州、沖縄などの暖地に生育する常緑低木。ガマズミに似るが、葉に艶がある。花期は4月。



ムクロジ科のモクゲンジは日本海側の崖地や中国に生育する落葉高木。本来日本に自生していたかは不明。花期は7月。果実(右)は洋紙質の風船のようで、中に黒い種子がある。



エゴノキ科のハクウンボクは、山地に生育する落葉高木。5月に咲く花は気品があってとても美しい。蒴果(下)には種子が1つ入っている。



トキワマンサクは園芸品がよく植えられているが、本来静岡、伊勢神宮、熊本、中国南部、インドに自生する珍しい樹木。野生のものは【CR】。白い花が4月に咲く。



ミカン科のキハダは温帯林の沢沿いに生育する落葉高木。樹皮は黄色くてとても苦く、漢方薬に使われる。



イイギリは山地の沢沿いに稀に見られる成長がとても早い落葉高木。1cmほどの液果は野鳥が好む。



スイカズラ科のウグイスカグラは山地に生える落葉低木。花期は4月。赤く熟した果実は食べられる。



ハナノキは長野、岐阜、愛知のみに自生するカエデの仲間。赤い花は4月中旬に咲く。



バラ科のバクチノキは太平洋沿岸に生育する常緑高木。樹木にしては珍しく9~10月に開花する。



シナノキ科のボダイジュは中国原産の落葉高木。寺院などによく植えられる。花には総苞葉というへら形の葉が付く。花期は6月。



モクセイ科のヒツバタゴは、別名ナンジャモンジヤとも呼ばれる。長野、愛知、岐阜、対馬、韓国、台湾、中国と分布が離れている。白い花は5月上旬ごろに咲く。



ムクロジ科のムクロジは神社などに植えられることが多い。秋の黄葉(上)は美しい。あめ色をした核果(右上)は2cmの大きさで中に黒い種子が入っている。種子は羽根つきの球や食用に使われる。果皮はサポニンを含み石けんの代用に使われる。水を加え息を吹き込むと泡立つ(右)。



モクレン科のユリノキは、チューリップツリーとも呼ばれる北アメリカ原産の落葉高木。花期は5月。上向きの集合果(下)は秋に熟すとバラバラになる。



ナツツバキは、鈴鹿山脈の標高500m以上の山地にまばらに生育する。樹皮はパッチ状に剥れる。花期は6~7月。

ラクウショウはヌマスギとも呼ばれる北米原産の落葉高木。針葉樹なのに紅葉する。直径3cmほどの球果(上)はバラバラになる。根からは膝根または呼吸根(下)が伸び出してくれる。

エノキとゴマダラチョウ

エノキは丘陵地や神社林などでよく見かける落葉高木です。エノキを食樹とするチョウの仲間は何種類かあり、国蝶であるオオムラサキも含まれますが、残念ながら四日市には生息していません。ここではゴマダラチョウの生態を中心に紹介します。



ゴマダラチョウの幼虫は秋に4齢になると幹を降り、根元に積もった落ち葉の裏で越冬する。



エノキの枝は先の方が急に細くなり、特有の樹形をしている。



4月上旬、芽吹きの気配を感じ取ると、ゴマダラチョウの幼虫はエノキの幹を登り始める。



エノキの芽吹きに合わせて、色鮮やかな5齢幼虫に変身する。



幼虫はもりもり葉を食べて育ち、6齢の終齢幼虫は4cm程にまでに成長する。



ゴマダラチョウの蛹^{さなぎ}は枝から下垂する。エノキの葉に鋸歯の形まで見事に擬態している。



羽化したばかりのゴマダラチョウの成虫。5月下旬と7月下旬の年2回発生する。



5月の下旬に産卵された卵から孵化した1齢幼虫。卵には細かな模様がある。

テングチョウの幼虫も同じエノキの新葉を食べて育つ。成虫は6月に羽化し、そのまま成虫越冬する。



フランスギクに集まる昆虫

フランスギクは欧州原産の多年草で、江戸時代末期に渡来しました。庭に植えられたり、野生化したりして各所に見られます。5月に咲く花には色々な昆虫が訪れ、観察に適しています。



ホソヒラタアブは体長10mmほど。季節によって腹部の斑紋は変わる。幼虫はアブラムシを食べる。



オオコンボウヤセバチはハナバチ類や狩蜂類に寄生する。雌には体長と同じぐらいの長さの産卵管がある。



ヤマトシジミの雌は雄に比べて青色部分が狭い。4月から11月頃まで年数回発生する。



ヒメトラハナムグリは珍しい種類。じょうし上翅に3本の黒帯がある。幼虫は朽木を食べて育つ。



オオハナアブは腹部の広い黄帯が特徴。



ヒメハナバチの一種は同定が困難。この仲間は地中に巣を作る。



アシブトハナアブは胸部の2本の縦筋が特徴。雌には腹部の三角形の黄紋がない。本種や上のオオハナアブの幼虫は水生。



キクスイカミキリは胸部の中央や前肢が赤い。幼虫はキクやヨモギの茎の中を食害する。土中で成虫越冬する。

キンケハラナガツチバチの雌。雄は触角がずっと長い。腹部各節の後縁には黄褐色の毛が密生する。雌は地中のコガネムシの幼虫に産卵する。



ヒメマルカツオブシムシは体長2.5mmの小さな甲虫だが、洗濯物などに付いて家の中に持ち込むと毛織物や標本をボロボロにする大害虫。

ハナグモは訪れる昆虫を待ち受けているが、コアオハナムグリほど大きければ襲われる心配はない。



エゾコヒラタアブは腹部にある3対の黄紋が全て離れているのが特徴。

公園のトンボ

公園にある池はトンボたちの格好の棲みかとなります。特に水草の豊富な池には多種のトンボが生息します。公園という気軽に行ける場所でトンボを観察してみるのもいいでしょう。



マユタテアカネは額面にある眉状斑が特徴(左下)。雄の腹端はツンと上に向く。



垂坂公園の池にはマコモやヒシ、ハスが密生する。初夏から夏はチョウトンボやショウジョウトンボの楽園となる。



ショウジョウトンボは体から複眼、顔、翅の基部まで真っ赤。1年1~2世代型。6~8月に多い。海岸に近い池にも見られる。



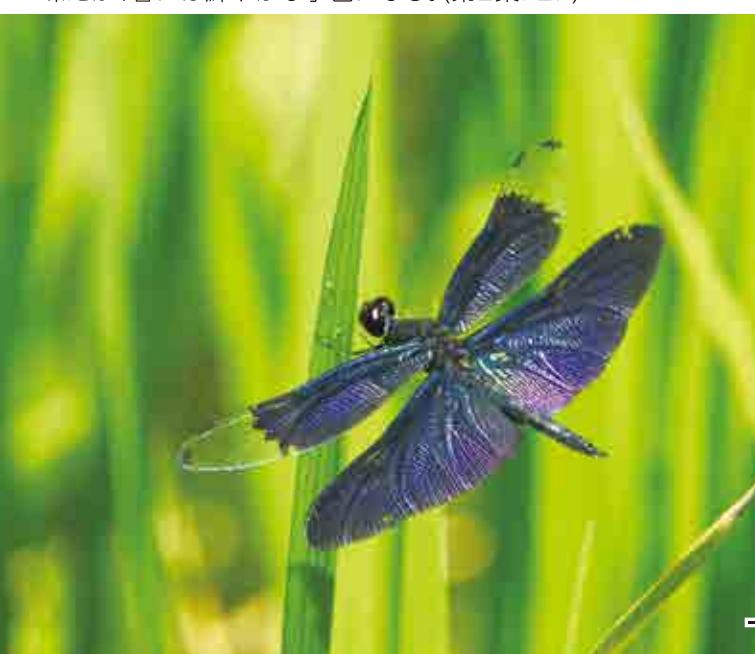
オオシオカラトンボの雄(左)は翅のつけ根の黒色部が特徴。シオカラトンボよりがつしりした印象。1年1~2世代型。左下は交尾中。雌は全く別種のように色合いが違う。下は雌が単独で連続打水産卵をしているところ。



ホソミイトンボは成虫越冬する。秋には写真のように地味だが、春には鮮やかな水色になる。(第2集P27)



交尾するシオカラトンボ。未熟な雄や雌は褐色をしていて麦わらトンボとも呼ばれる。成熟した雄は腹部が青白くなる。



チョウトンボは光の当たり方で微妙に色が変わる。1年1世代型。チョウのようにひらひらと飛ぶ。6~8月に多い。



クロスジギンヤンマの雄はパトロールに飛び立つとめったに静止しない。黄緑色と水色の対比が美しい。1年1世代型。



単独で水草の組織内に産卵するクロスジギンヤンマの雌。5~6月によく見られる。



ギンヤンマは大型種では珍しく連接して産卵する。昔から子どもたちの遊び相手として人気があり、糸の端に重りをつけて投げ上げ、捕獲する遊びがあった。雄は腰の水色が特徴。1年1~2世代型。



カトリヤンマは秋頃室内に飛び込んでくることがある。近年、水田環境の変化により激減したヤンマ。1年1世代型。



コシアキトンボの雄は腹部第3~4節の白色部が特徴。名前も「腰明き」または「腰空」からきている。成熟した雄は水辺に縄張りを持ち、時に激しく縄張り争いをする。



コシアキトンボの雌は単独で打水産卵する。未熟な内は林の空間を群れて飛翔し餌を探る。1年1世代型。



ウスバキトンボは越冬できず、南方から北上しながら発生を繰り返す。8月に多くなり、赤トンボと思われているのはほとんどが本種。

ウスバキトンボは1世代を最短30日で羽化できる驚異的な成長をする。ヤゴは水溜りのような場所でも生育できる。

夜の公園

日頃通い慣れた公園でも、夜に行くことはめったにありません。ライトの灯り一つで見る光景は昼間とはまったく異なり、新しい発見に満ちています。夜行性の動物が見られるのも大きな魅力です。しかし、観察には危険を伴うので、長袖、長ズボン、長靴などの準備は必要です。



コナラの樹液には昼間のサトキマダラヒカゲに替わってキシタバがやって来た。幼虫はフジを食べる。



カラスヨトウは全身黒色。幼虫はヤブガラシなどを食べる。



ヒモミノガの一種の幼虫は8cmほどのひも状の巣を作る。昼間でもいるのだが、ライトの中では巣のわずかな動きも目に留まりやすい。



ニイニイゼミは木の低い位置で羽化する。体はほぼ真横に出ている。翅にはすでに色がついている。



コクワガタは昼間木の穴に隠れていることが多いが、夜間は活発に活動する。



ユミアシオオゴミムシダマシは胸部に縦溝がある。

ヤマトゴキブリの雌は短翅型。
アズキ色のものは卵塊。



昼間は見かけないウリ坊も姿を現す。イノシシは危険なので近づいてはいけない。



ヤマシロオニグモは日没後に円網を張り、中心で獲物を待つ。



ベニスズメがホバリングをしながら樹液を吸いに来た。翅は高速で動かしている。幼虫はマツヨイグサ類やホウセンカを食べる。

灯火に集まる昆虫

水銀灯や屋外トイレの灯りなどには、ガの仲間や甲虫などの昆虫が集まっています。これは昆虫が紫外線に誘引されるためで、紫外線を出さないLED照明には集まつません。山の中の旅館に泊まつたときには、思わぬ昆虫に出会えるかもしれません。



オオシラホシアツバはL字形の白斑が特徴的。成虫は6~9月に発生する。



ウスキツバメエダシャクは5~11月に発生し、日中飛ぶこともある。幼虫はイヌツゲやクヌギを食べる。



ナシイラガは止まり方が特徴的。幼虫はカキ、ナシ、クリなどを食べる。個体数は多くない。



オトモエは開長が10cmもある大型のガ。サルトリイバラを食草として5月と7~8月の年2回発生する。



モンクロシャチホコは特徴ある斑紋で識別が容易。幼虫は黒い毛虫で、サクラなどに大発生する。



シリナガカミキリモドキは体長15mmほど。腹端が突出するのが特徴。



アミメクサカゲロウはクサカゲロウ類では大型種。触角が非常に長く、翅に斑点がある。



セダカシャチホコはシックな色合いで。黄色い2点がアクセント。幼虫はクリやクヌギを食べる。



オオホシカメムシは細長いカメムシ。2つの黒紋が特徴。



昆虫が集まるのを期待して二ホンアマガエルが屋外トイレのスイッチの上でちゃっかり待っていた。

ナナホシヒメグモは不規則網を張って集まる昆虫を待つ。腹部には艶があり、白斑が特徴的。



里山保全活動

2010年頃から東海や近畿地方で、カシノナガキクイムシによるナラ枯れの被害が広がりました。これは里山が放置され、コナラなどが大径木となつた事が一因となっています。そこで、南部丘陵公園では2012年秋から小面積の皆伐を行つて、林を若返らせる取り組みが続いています。



大径木の伐倒はチェーンソーを使って行われる。



葉が展開してから枯れたコナラ



小径木の伐採はノコギリなどを使ってまさに人海戦術で行われる。伐採木の運び出しは重労働。



きらら
雲母尾根の標高700m付近のミズナラ林でも人知れずナラ枯れは進行している。被害はブナ科の植物全体に広がる可能性があり、早急に対策を講ずる必要がある。



キクイムシが侵入したコナラの根元には、きなこのような木くずが大量に見られる。ここまで進行すると確実に枯れる。



小面積皆伐の目的や意義を市民に知らせるために看板が設置されている。



カシノナガキクイムシの被害にあったコナラの断面。たくさん小さな穴が開いている。

車が入れる所は大型のチップ車を使って直径5cm程度の木までチップにすることができる。

車が入れない傾斜地では、自走式の小型のチップ車を使用する。シイタケの原木や薪として使えるものは残しておく。





皆伐をすれば、それで終わりではない。光が当たるようになると、ケネザサやアカメガシワなどが一気に成長する。コナラなどの残すべき萌芽にテープを巻き、その他は下刈りをしなければならない。

皆伐から2年経過した林。コナラの萌芽は人の背丈ほどになっているが、下刈りに要する労力は相当なものだ。

一時は松枯れでほとんど無くなっていたアカマツも若木が勢いよく成長してきた。



オカトラノオはサクラソウ科の多年草。近年ほとんど姿を消していたが花を咲かせるようになった。



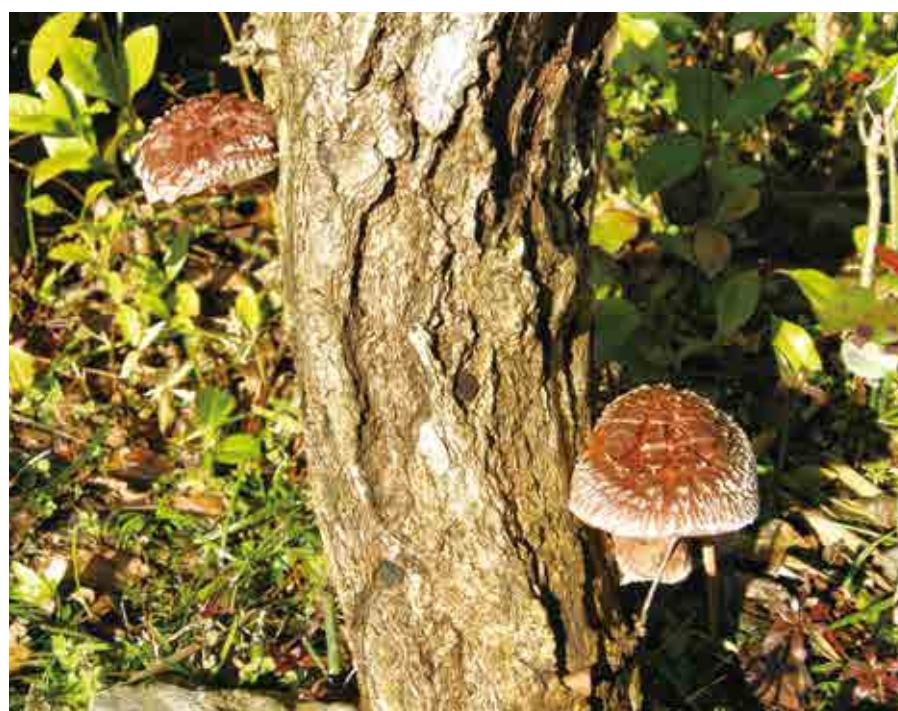
伐採から3年目のコナラの萌芽。切り株から輪を描くように5本の幹が伸びる。定期的に伐採される林ではこのような樹形になるのが普通。



被圧されていたササユリ【NT】も光がさすようになると花を咲かせる。



アカシジミの幼虫(成虫は第1集P45)はコナラの老木よりも若い木を好む。2017年に初めて確認され、2019年には個体数がかなり増えた。



コナラを原木として菌打ちをすると2~3年でシイタケが採取できる。しかし、温度や湿度の継続的管理が必要。

秋の公園

秋は気候的にも外出しやすい時期です。公園を歩きながら季節の変化を感じ取ったり、植物や昆虫などを観察したりすると心のゆとりも出てくるものです。



ユリノキの黄葉は黄緑色から黄色、茶色へと移り変わっていく。



ススキの穂が出てくると、いかにも秋の訪れを感じさせてくれる。



カラスウリの実は赤くてきれいだが、時間がたつと色あせてしまう。



ニホンカナヘビ(上)とニホントカゲの幼体が出くわした。尾が青く背に黒線があるのは幼体の時だけ。



ツルボは薄紫のかわいい花を9月に咲かせる。



ミノウスバは翅はねが透きとおるガの仲間。幼虫はマサキやニシキギを食べる。



クロミヤクチャタテは体長5mmほど。釣針のような白斑が特徴。発音する。チャタテムシの仲間は古くはペルム期から化石が出ている。



ウラナミシジミは四日市では越冬できず、温暖な地域から発生を繰り返しながら北上してくるので秋に多い。幼虫はインゲンやダイズなどマメ科の栽培種を好む。



トウカエデは中国、台湾を原産とする落葉高木。紅葉が美しいので、街路樹としてもよく植栽される。樹皮はめぐれ上がる。



ガマズミの実は熟すと酸っぱいが食べられる。野鳥も好んで食べる。



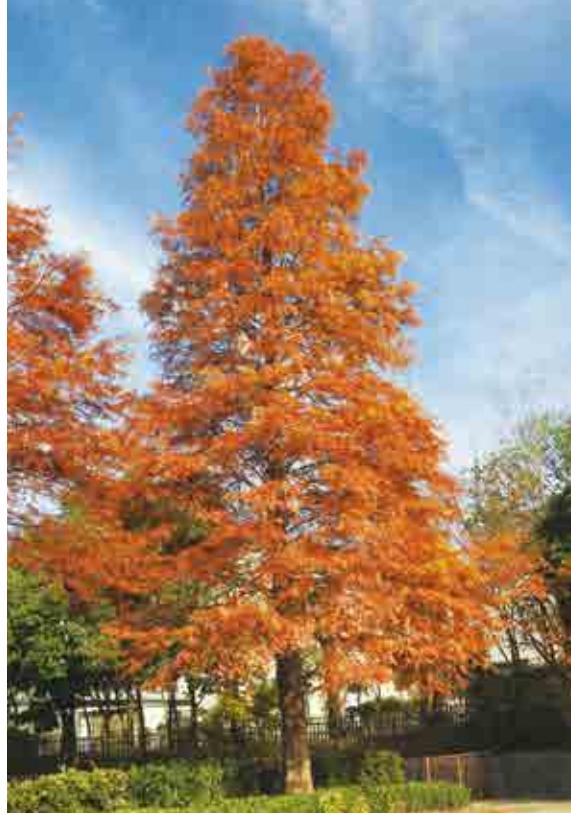
ウラギンシジミには夏型と秋型があり、写真は秋型の雌。夏型は前翅の先端が丸みを帯びる。雄は銀白色の部分がオレンジ色。



サンシュウの実は鮮やかな赤色になる。庭に植えられ、生け花にも使われる。



メタセコイアは生きている化石として有名な落葉高木。樹形は尖る。



ラクウショウはメタセコイアに比べて樹形が膨らむ。葉は互生につく。



ウスバツバメガは前翅の付け根の橙黄色が鮮やか。幼虫はサクラなどを食べる。



ナワシログミは葉が橢円形るのが特徴。花は10~11月に咲く。花はいい香りがする。



オジロアシナガゾウムシはクズの上で見られる。擬死をする。



シロオビノメイガは11月頃まで見られる。幼虫はケイトウの花やホウレンソウなどを食べる。

アオバアリガタハネカクシが後翅を広げた瞬間。普通は紺色の前翅の下に精巧に折りたたまれている。



ホタルガは6~10月に発生する。体は毒々しい赤色。幼虫はヒサカキを食べる。



キタキチョウは近年ミナミキチョウと分けられた。夏型と秋型があり、成虫越冬する。写真は秋型の雄で、雌はもっと黄色が薄い。幼虫はハギ類やネムノキを食べる。



ヒメアカタテハの幼虫はヨモギやハハコグサを食べ、年3~4回発生し成虫越冬する。



リンドウ科のイヌセンブリは11月上旬頃に咲く。センブリよりも葉の幅がやや広く、苦みは少ない。



サルトリイバラは12月に黄色から茶色へと味わいのある色に黄葉する。



ノコギリカミキリは体長45mmあり、9月頃まで見られる。触角は糸鋸の歯のような形。



ツタは落葉つる性木本。巻きひげの先端が吸盤になって這い上がる。その紅葉は実に鮮やか。



ヨコヅナサシガメは中国やインド原産の外来昆虫。他の昆虫を襲い体液を吸う。樹木の幹で成虫越冬する。脱皮直後は赤い。



モミジバフウは北中米原産のマンサク科の落葉高木。実の形が面白い。



キボシカミキリは黄色い斑紋があつて見分けやすい。5~12月まで発生する。幼虫はイチジクの材を食べる害虫。



日光浴するムラサキシジミの雌。雄は青い部分がやや広い。幼虫はアラカシを食べ、年3回発生して成虫越冬する。

ヤブコウジは15cmほどの常緑小低木。核果は秋に赤く熟す。



樹皮をよく探すとキハダカニグモが忍者のように隠れていて、通りかかる昆虫を襲う。



フユノハナフラビは日当たりの良い草地に生えるシダ植物。胞子葉が立ち上がり、秋から冬に熟す。



クヌギの黄葉は青空に際立つ。



ムヨウランの一種の果実。目立たないが、この仲間には希少な種類が多いので、見逃せない。



キマダラカムムシは近年急速に分布を拡大している東南アジア原産の外来昆虫。成虫で越冬する。



エゴノキの実はヤマガラの大好物。貯食行動が観察できる場合もある。

ヤマボウシは花(第1集P35)も紅葉もきれいなので、公園にも植えられる。



コウヤボウキの花に群がるクチナガガンボの一種。蜜を吸っていると思われる。



舌を出すニホントカゲの成体。体長は20cm以上にまでなる。眼の後方の穴は耳孔。



タンキリマメの果実

コラム 植物の擬態

タンキリマメの果実は赤色と黒色の2色対比で目立つようになっていて、おいしそうな実に擬態している。野鳥が間違って食べても消化される部分は無く、そのまま排出され、まとまと種子を散布できる。同じ手法で野鳥に種子を散布してもらう植物には、他にトベラやゴンズイがある。擬態と言えば動物を連想しがちだが、植物の中にもあるのはほとんど知られていない。



コナラは4月下旬に開花する。左奥の黄色い雄花は分かりやすいが、赤い雌花は小さく見過ごしやすい。



コナラのドングリは艶があり、いかにもドングリらしい形をしている。

1年でドングリができる種類

コナラ、ミズナラ、アラカシ、シラカシ、イチイガシ、ナラガシワなどは春に開花してその年の秋にドングリができる。



7月のシラカシのドングリ。まだドングリの形にはほど遠い。



アラカシのドングリは熟すのが遅く、11月になってから。



イチイガシの葉の裏には一面に毛がある。



イチイガシのドングリは渋みが少なく、食用にできる。

ドングリ
ブナ科のカシ類やナラ類、シイ類などの堅果をドングリと呼びます。小さな子どもには「ドングリ拾い」で身近な遊び相手になります。ドングリは動物の大切な餌になる他、人が生で食べられる種類もあります。



シラカシも10月になるとドングリらしい形になる。



クリもブナ科なので、広義にはドングリの仲間に入る。



ナラガシワは西日本に多い木で、市内にも植えられている。



9月頃、ハイイロチョッキリに切り落とされたコナラの枝。殻斗に穴を開けて産卵し、枝を切る。



ハイイロチョッキリが開けた産卵痕。必ず殻斗の部分に開けられる。



コナラシギゾウムシも10月にコナラの殻斗に穴を開け産卵するが、枝は切り落とさない。幼虫は実を食べて育つ。

ハイイロチョッキリは体長8mm。
口吻は長く、体が毛深い。

2年かかってドングリができる種類

スダジイ、ツブラジイ、マテバシイ、アカガシ、ウバメガシ、ウラジロガシ、ツクバネガシ、クヌギ、アベマキなどは春に開花し、冬を越して翌年の秋にドングリができる。



ウバメガシは熊野灘沿岸の岩場に生育し、備長炭の材料として重要。公園にもよく植栽される。雄花(上)は4月下旬に開花する。ドングリ(下)は堅果の大きさに対して殻斗が小さい。



マテバシイの1年目の冬(上)はまったくドングリには見えない。2年目の秋に熟したドングリは渋みがなく食べられる。ツッキーなどにすると良い。



クヌギの1年目の冬(左上)はまだ3mmほどの大きさ。2年目の7月ごろ(左下)から急に成長し、10月には立派なドングリ(上)になる。



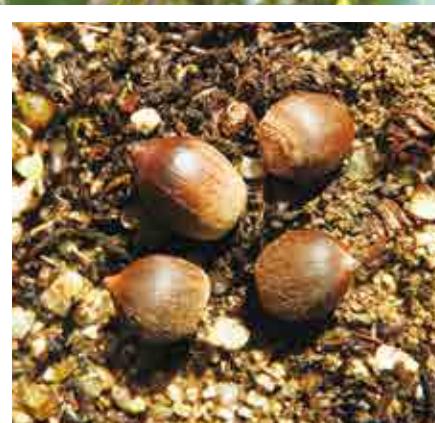
アベマキのドングリはクヌギに似るが、殻斗にある鱗片がより長い。リースの材料にも適している。



オオツクバネガシのドングリは殻斗が毛深い。オオツクバネガシはアカガシとツクバネガシの雑種とされ、平野部の神社林に普通に見られる。葉(下)はアカガシのように葉柄が長く、わずかに鋸歯が入る。



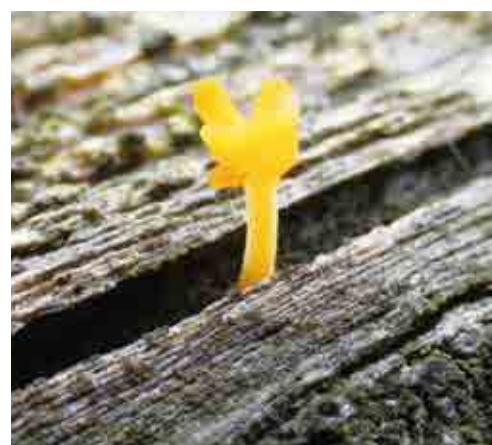
スダジイのドングリは10月になってから殻斗が3つに裂けて姿を現す。長さは15mmほど。



ツブラジイ(写真)とスダジイはドングリの形以外で区別するのは難しい。スダジイが縦長の砲弾形なのに対してツブラジイは小さくほぼ球形に近い。

公園のキノコ

樹木の多い公園では、いろいろな種類のキノコに出会うことができます。地面だけでなく枯れ木や倒木なども探してみましょう。運が良ければ、変形菌類のような興味深い菌類が見つかるかもしれません。





マンンタケは広葉樹の地際から発生する。赤褐色のコルク質でニス状の光沢がある。



サンコタケは梅雨から秋に発生し、頂部が裂開して3本の腕を伸ばす。



ソライロタケは夏から秋に発生する。全体が空色だが傷つくと黄変する。



オオセミタケは地中のアブラゼミの幼虫に寄生する。子実体は幼虫の頭部か胸部から伸び、地上に4~7cm出る。



ベニチャワントケは直径1~5cmの杯状。鮮やかな赤色はとても目立つ。



キツネノハナガサは夏から秋に落ち葉より発生する。幼時に長卵形の傘は水平から杯状に反り返る。



ザラエノハラタケは夏から秋に針葉樹林内に発生する。つばより下は綿くず状の鱗片をつける。



ナシの赤星病菌は、植物寄生菌類に属し、ナシやカマツカなどのバラ科の樹木につく。そこで成熟したさび胞子はビヤクシン類に感染し、冬胞子堆を形成する。写真はその湿潤状態。



アラゲコベニチャワントケ属の一種は、近縁種が多くあり、同定は困難。



ノウタケは梅雨から秋の林内に発生。10cmほどの胞子の塊になる。



エダナシツノホコリは夏から秋に朽ち木上に群生する。子実体は根棒状。



ススホコリは夏、落ち葉の上に発生し、黄色い変形体は動きが活発。



ウツボホコリ属の一種は夏から秋に朽木上に群生する。子実体は赤色から褐色。

公園の野鳥

公園を散歩するとさまざまな野鳥と出会います。肉眼での観察ではなかなか識別ができないので、野鳥の鳴き声を先に覚えるといいでしょう。種類が分かるようになれば、観察も一段と楽しくなります。



ヤマガラは全長13cmの留鳥。雌雄同色。ツーピーツーピーとゆっくりとしたテンポで囁く。巣箱を利用することもある。エゴノキやシイの実を好み、貯食行動をする。



器用に枝にぶら下がって餌を探すエナガ。その巣(上)はコケ、獣毛、羽毛、クモの巣などを使った袋状。外側にウメノキゴケを使うので見つけるのは困難。一度におよそ10卵を産み、巣立ち後は数家族群が集まって40羽ほどの群れを作る。ジュリリリリーという警戒声は、近くに猛禽類がいるサイン。



ツグミは全長21.5cmあり、冬鳥として渡来する。芝生や水田に多い。このように翼を下げている姿勢もよく見かける。春は4月下旬ごろまで残る。写真は雄。



シロハラの第1回冬羽はおおあまおおい大雨覆の先がバフ色で、雌雄の区別はできない。



ホオジロは全長16.5cm。一年中生息し、繁殖する。チチッとチを2音続けて鳴くのが特徴。写真は雌だが雄は頬が黒い(P45)。

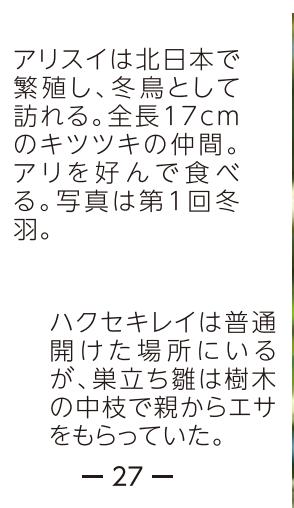


孵化後6日目くらいのホオジロの巣内雛(左)と孵化後2週間経って巣立ちした雛(右)。幼羽は親とかなり色合いが違うが、鳴き声だけは同じ。



アリスイは北日本で繁殖し、冬鳥として訪れる。全長17cmのキツツキの仲間。アリを好んで食べる。写真は第1回冬羽。

ハクセキレイは普通開けた場所にいるが、巣立ち雛は樹木の中枝で親からエサをもらっていた。





コゲラは全長13.5cmの小さなキツツキで、街中でも見かける機会が多い。写真は雄成鳥。目の後方にかすかに赤い羽毛が見える。

巣穴は枯木に掘り、昆虫を給餌する。

巣穴から顔を出すコゲラの巣立ち直前の雛。全部で3羽が巣立った。



エゾビタキは旅鳥として秋に少数見られる。胸の斑模様が特徴。昆虫をフライングキャッチする。

キビタキ【NT】は春や秋の渡りで見られる。写真の雌成鳥は地味な色合いだが、尾の茶色が特徴。

トビは2000年頃著しく減ったが、近年また見かけるようになった。三重県南部には多い。



コジュケイは全長25cmのキジの仲間。ピッピュグイと大きな声で繰り返し鳴く。1920年頃に移入された種。

ベニマシコの雄は四日市では数少ない赤い鳥。冬鳥として渡来し、フィットポと鳴く。

エゾムシクイは4月下旬頃に四日市を通過し、本州中部以北の亜高山帯で繁殖する。ヒーツーキーと特徴のある声で疊るので認識しやすい。



カラスにちょっかいを掛けられるノスリ。立場は弱い。

コムラサキの実を食べるジョウビタキの雌。翼の白斑が特徴。



モズのはやにえ

モズは全長20cmの大きさですが、嘴や爪は鋭く、小さな猛禽類と言えます。モズには「はやにえ」といって餌の小動物を枝に刺す習性があります。これは厳冬期の保存食と考えられますが、テリトリーの印という説もあります。早春から繁殖に入りますが、6~8月は姿を消すので高地に移動していると思われます。



モズの雄(左)は過眼線が黒く、翼に白斑がある。雌(右)は過眼線が褐色で胸にうろこ模様がある。秋にはキィーキーと高鳴きをし、雄雌単独で縄張りを張る。



ペリットを吐こうとしている雌(左)とペリット(右)。ペリットは2.5cmほど
の楕円形で、甲虫の翅や小動物の骨などが入っている。

モズのはやにえの例。左上から時計回りに、ニホンカナヘビ、ニホンアマガエル、
オンブバッタ、シオカラトンボのヤゴ。これらの中にも、ヒミズ、カマキリ、ヒル、
ミミズ、小鳥なども刺す。11~12月頃に刺され、餌が最も少なくなる2~3月に無くなる
場合が多いので、保存食の意味合いが強いと思われる。



ムクドリ



ムクドリの雄成鳥(左)と雌成鳥(右)。雄の方が頭部の黒味が強い。冬に群れていてもペアができるで、2羽で行動する。



毛虫を食べるムクドリ。ムクドリが1年間に食べる害虫の量は莫大。もし本種がいなかつたら大きな農業被害が出ると予想される。

雨戸の戸袋に作られた巣からヒナのフンを運び出す幼鳥。この個体はヘルパーとして給餌を手伝っている。



春や秋の渡りの時期には、コムクドリが混じることもある。

味の素 バードサンクチュアリ

味の素株式会社東海事業所には、約13,000m²もの生物多様性保護区域があります。ここでは6種類のサギ類が繁殖し、20種類以上の野鳥が見られます。工場見学者の内、野鳥観察を希望する人には、観察小屋が開放されています。



池の縁で休むゴイサギの成鳥。夜行性のサギで、カエルやザリガニなどを食べる。飛びながらクワッとした鳴く。近年著しく減った種類。



バードサンクチュアリの全景。池にはカモ類やカワセミなどが飛来する。



サギ類のコロニー全景。繁殖期は3~7月。



孵化後18日ほどの5羽のコサギの雛。虹彩は暗灰色。嘴の色には変異がある。



チュウサギ[VU]のペア(右上)と孵化後18日ほどの雛。チュウサギの雛は虹彩が黄白色でダイサギに似るが、口角は眼の後縁まで。



ダイサギの親鳥と孵化後8日目くらいの雛。ダイサギは樹木の高所に営巣する傾向がある。



アマサギの成鳥(左)は虹彩が真っ赤。右は孵化後12日ほどの雛。虹彩は白い。餌はほとんど水田で捕り、オタマジャクシやバッタなどを好む。